

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第2章「1号機爆発」

3月12日正午前、福島第一原発1

号機のベント作業で第2班として原

子炬建屋に突入した巨班当直長遠藤

英由(51)ら2人は1号機北側の「沙

見坂」を上り、免震重要棟に向かっ

ていた。ベント作業で大量被ばくし、

中央制御室から出るよう命じられた

のだった。

遠藤は坂の途中で何度も振り返っ

た。制御室にいる仲間たちのことが

気掛かりだった。

「赤ん坊が生まれたばかりの20代、

30代の人たちもまだ残っていたんで

すよ」

2時間半前を思い起した。巨万

抑制室上部の「キヤットウオーク」

⑨

頭を下げた当直長



福島第一原発の1、2号機中央制御室。手前が2号機側、奥が1号機側。2月

「頼む、残ってくれ」

と呼ばれる円形の通路をあと30分進

めば、目標の弁に到達できた。あと一

30分…。だが毎時千ギガまで計測で

きる線量の針が振りが切れてしまっ

た。

「判断は間違っていないか」と思

います。もし弁まで行っていたら被

ばく線量は20ギガでも済まなか

ったでしょう」

線量がどの程度高いか分からない

というのは恐ろしい状態だ。現に東

京電力が事故翌年の6月、1号機圧

力抑制室付近を計測したところ、最

高で毎時10・3ギガ(一万300ギガ)

という極めて高い線量が確認され

た。人が1時間浴びれば高い確率で

死亡
人は量
00ギガ
なり、

「集